

セム系部族社会の形成： ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究

—文部科学省科学研究費補助金 平成 17 年度発足特定領域研究—

大沼 克彦

Formation of Tribal Communities in the Bishri Mountains, Middle Euphrates:

Grant-in-Aid for Scientific Research on Priority Area (2005-2009) from the MEXT, Japan

Katsuhiko OHNUMA

研究の概要

平成 17 年度から 21 年度の 5 年間にわたって推進されている本研究は、総括班と人文、自然両科学の多彩な学問分野による 13 件の計画研究班、および、2 件の公募研究班で構成され、西アジアの古代王国を創建したセム系部族アモリ人 (Amorite) の原郷とされるビシュリ (Bishri) 山系で総合調査をおこない、同地の先史社会が定住社会を経て古代都市的農耕村落社会へ発展した経緯と、定住社会の出現とどのように関係してセム系部族社会が形成されたかを、先史時代にまでさかのぼって通時的に解明することを目的とする。

以上の目的を達成するため、本研究はシリア現地研究と国内・外関連研究の 2 つによって推進される。現地研究は遺跡分布調査 (遺跡の分布状況と遺跡毎の年代の解明、発掘対象遺跡の選定)、選定遺跡の発掘調査と周辺調査、4 年間の調査成果を踏まえた総括的・補足的現地調査 (最終年度) と進行する。関連資料の実見・分析、文献資料の収集・整理・解説・データベース化などから成る国内・外関連研究は現地調査と併行して推進される。

多彩な研究分野 (5 件の研究項目: 考古学的研究分野、文献史学的研究分野、自然科学的分析研究分野、文化史的研究分野、遺跡のデータベース化推進研究分野) に属する 13 件の計画研究班と 2 件の公募研究班は、それぞれ独自の研究を遂行するのと併行して、本研究領域の全体課題のもとで融合的な連携研究を推進する。このことを通して、本研究は既成学問分野の個別枠にとらわれない新たな研究方法を創出する。

本研究はまた、ややもすると特定遺跡の歴史を再現するにとどまりがちな伝統的考古学と異なり、遊牧部族社会の流入と離脱を不断に繰り返してきた西アジア都市の歴史的特性を通時的に解き明かし、セム系部族社会が形成された経緯を明らかにする。

そのうえで、古代文明でもイスラムでもない、その両者を貫く「部族性」をキーワードとして西アジア都市・村落の歴史と社会を解明する。

西アジア地方は世界で最古に農耕、家畜飼育、都市文明が出現し、イスラム時代に至るまで豊かな歴史が連綿と継続した地域である。したがって、総合的かつ通時的な研究を推進する本研究が部族社会の形成・都市形成に関するモデルを提示することも可能である。

さらに、セム系部族社会の形成経緯を明らかにするなかで、「セム系部族社会 = イスラム原理主義 = テロリスト」という、西アジア社会に対する偏見的・短絡的な観念を根本から見直させることも可能である。現代のセム系部族社会が近年になって突如と出現したものではなく、長い歴史のなかで、争い、宗教など、生存努力として選択された順応活動の結果として形成されたことを示すことになるからである。

旧石器時代から歴史時代までを対象とする西アジア考古学研究は、過去 150 余年にわたり欧米調査団によって推進されてきた。その一方で、同地における邦人の考古学研究は 1956 年以来、東京大学、国士館大学、筑波大学、金沢大学、古代オリエン特博物館、中近東文化センター、奈良・パルミラ遺跡発掘調査団、日本聖書考古学発掘調査団などによって推進され、世界的にも高い評価を受けてきた。しかしながら、これら邦人の一連の研究が複数研究分野の連携にもとづく総合的研究ばかりでなかったこともまた事実である。

そこで、邦人調査団が今日まで西アジア地方で蓄積してきた個別的研究成果を踏まえつつもそれらにとらわれず、複数研究分野が融合的に連携しながら推進する総合的な研究として本研究領域を設定した。

研究の組織

本研究は以下の組織によって推進されている。

総括班「総合的研究手法による西アジア考古学」研究代表者: 大沼克彦 (国士館大学イラク古代文化研究所教授)、連携研究者: 藤井純夫 (金沢大学人間社会研究域教授)、西秋良宏 (東京大学総合研究博物館教授)、常木晃 (筑波大学大学院人文社会科学部研究科教授)、宮下佐江子 (古代オリエン特博物館研究部研究員)、佐藤宏之 (東京大

学大学院人文社会系研究科教授)

研究項目 A01 (考古学的研究分野)

計画研究A「西アジア旧石器時代の行動進化と定住化プロセスの関係」研究代表者:佐藤宏之(東京大学大学院人文社会系研究科教授)、連携研究者:大沼克彦(国士館大学イラク古代文化研究所教授)、橘昌信(別府大学文学部教授)、安斎正人(東北芸術工科大学東北文化研究センター教授)

計画研究I「西アジア乾燥地帯への食料生産経済波及プロセスと集団形成」研究代表者:西秋良宏(東京大学総合研究博物館教授)

計画研究U「セム系遊牧部族の墓制に関する比較研究」研究代表者:藤井純夫(金沢大学人間社会研究域教授)、連携研究者:足立拓朗(中近東文化センター附属博物館研究員)、徳永里砂(慶応大学文学部非常勤研究員)

計画研究E「西アジアにおける都市化過程の研究」研究代表者:常木晃(筑波大学大学院人文社会科学系研究科教授)、研究分担者:三宅裕(筑波大学大学院人文社会科学系研究科准教授)、山田重郎(筑波大学大学院人文社会科学系研究科教授)、池田潤(筑波大学大学院人文社会科学系研究科准教授)、石田恵子(古代オリエント博物館研究部研究員)

計画研究O「北メソポタミアにおけるアッシリア文明の総合的研究」研究代表者:沼本宏俊(国士館大学体育学部教授)、研究分担者:柴田英明(国士館大学理工学部教授)、真保昌弘(国士館大学イラク古代文化研究所共同研究員)

研究項目 A02 (文献史学的研究分野)

計画研究力「[シュメール文字文明]の成立と展開」研究代表者:前川和也(国士館大学21世紀アジア学部教授)、研究分担者:前田徹(早稲田大学文学学術院教授)、依田泉(常磐大学国際学部教授)、森若葉(総合地球環境学研究所プロジェクト上級研究員)

計画研究キ「パレスチナにおける都市の発達と「セム」系民族の展開」研究代表者:月本昭男(立教大学文学部教授)、研究分担者:山我哲雄(北星学園大学経済学部教授)、市川裕(東京大学大学院人文社会系研究科教授)、牧野久美(鎌倉女子大学児童学部准教授)、連携研究者:桑原久男(天理大学文学部准教授)

研究項目 A03 (自然科学的分析研究分野)

計画研究ク「環境地質学、環境化学、14C年代測定にもとづくユーフラテス河中流域の環境変遷史」研究代表者:星野光雄(名古屋大学大学院環境学研究科教授)、研究分担者:田中剛(名古屋大学大学院環境学研究科教授)、中村俊夫(名古屋大学年代測定総合研究センター教授)、吉田英一(名古屋大学博物館准教授)、東田和弘(名古屋大学博物館助教)、連携研究者:齊藤毅(名城大学理工学部准教授)、桂田祐介(名古屋大学学生相談総合センター研究員)

計画研究ケ「ユーフラテス河中流域とその周辺地域の住民に見られる形質の時代的变化」研究代表者:石田英實(滋賀県立大学人間看護学部教授)、研究分担者:熊倉博雄(大阪大学大学院人間科学研究科教授)、近藤修(東京大学大学院理学系研究科准教授)、荻原直道(京都大学大学院理学研究科助教)、中野良彦(大阪大学大学院人間

科学研究科准教授)

計画研究コ「西アジア先史時代から都市文明社会への生産基盤の変化に関する動物・植物考古学的研究」研究代表者:本郷一美(総合研究大学院大学准教授)、研究分担者:丹野研一(山口大学農学部助教)、那須浩郎(総合研究大学院大学葉山高等研究センター上級研究員)、茂原信生(奈良文化財研究所埋蔵文化財センター非常勤研究員、国立科学博物館非常勤研究員)

研究項目 A04 (文化史的研究分野)

計画研究サ「古代西アジア建築における組積技術の形態と系譜に関する研究」研究代表者:岡田保良(国士館大学イラク古代文化研究所教授)、研究分担者:深見奈緒子(国士館大学イラク古代文化研究所共同研究員)、吉武隆一(国士館大学イラク古代文化研究所共同研究員)、連携研究者:山内和也(東京文化財研究所文化遺産国際協力センター地域環境研究室長)、新井勇治(愛知産業大学造形学部准教授)、辻村純代(国士館大学イラク古代文化研究所共同研究員)

計画研究シ「オアシス都市パルミラにおけるビシユリ山系セム系部族文化の基層構造と再編」研究代表者:宮下佐江子(古代オリエント博物館研究部研究員)、研究分担者:津村眞輝子(古代オリエント博物館研究部研究員)、勝木言一郎(東京文化財研究所企画情報部情報システム研究室室長)、西藤清秀(奈良県立橿原考古学研究所共同研究員)

研究項目 A05 (遺跡のデータベース化推進研究分野)

計画研究ス「西アジアにおける考古遺跡のデータベース化の研究:衛星画像解析による探査法」研究代表者:松本健(国士館大学イラク古代文化研究所教授)、研究分担者:長谷川均(国士館大学文学部教授)

公募研究

- 1)「北方ユーラシア遊牧民部族社会の考古学的研究」(平成18、19年度)研究代表者:高濱秀(金沢大学文学部教授)
- 2)「人類学・歴史学によるアラブ系部族組織再考」(平成20年度)研究代表者:赤堀雅幸(上智大学外国語学部教授)、研究分担者:黒木英充(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授)、連携研究者:錦田愛子(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所研究員)

これまでの研究成果

本研究領域が発足した平成17年度以来、研究発表会、公開シンポジウム、そして、招聘研究者による専門知識の提供を積極的に開催(於古代オリエント博物館会議室等)し、研究班すべての執筆によりニューズレターと研究成果報告書を定期的に出版した。ホームページを頻繁に更新して研究成果の積極的公表に尽力した(開設:平成17年9月14日、英語版開設:平成19年2月25日、更新:平成20年12月時点で27回)。平成19年3月24日には総括班主催の外部評価を実施した。そして、国内・外研究機関保管資料の研究、研究資料のデータベース化など、研究班

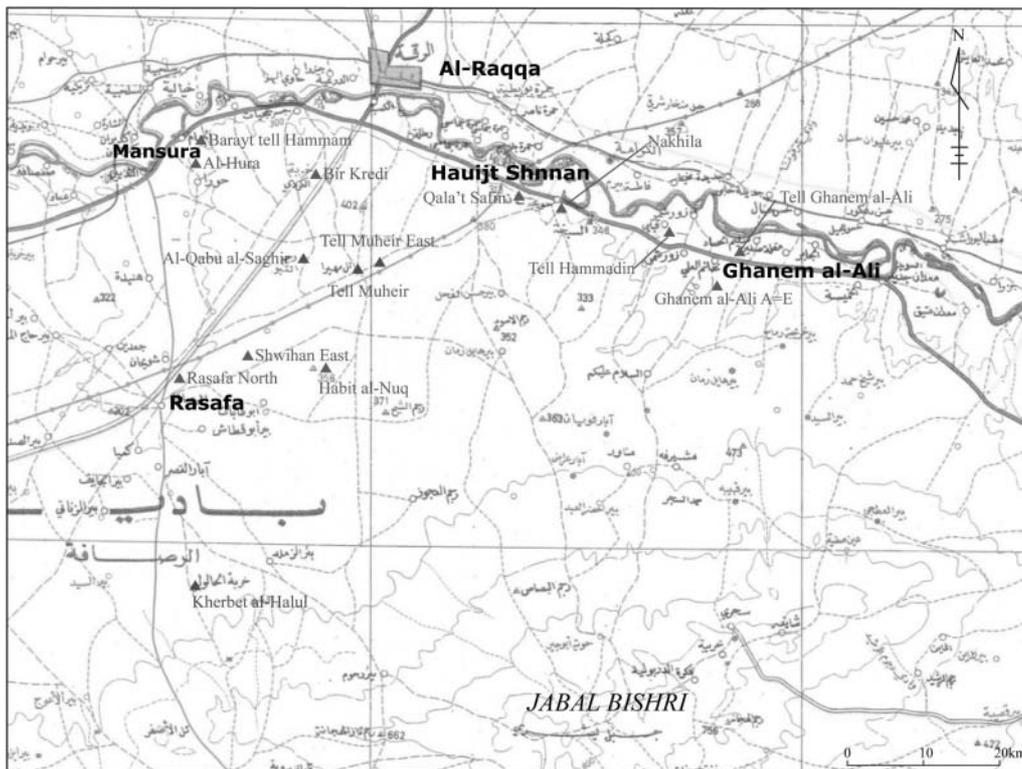


図1 ビシュリ山系の遺跡分布図



図2 ガーネム・アリ遺跡の Square 1



図3 ガーネム・アリ遺跡の Square 2



図4 ガーネム・アリ遺跡 Square 2 出土の土器



図5 ガーネム・アリ遺跡 Square 2 出土のテラコッタ (ウマ)



図6 ガーネム・アリ遺跡：表土クリーニングであらわれた墓状遺構



図7 ガーネム・アリ遺跡直近の墓群



図8 発掘後のビシュリ山北麓のケルン墓 (Rijim Hedaji 1)

各々が推進する国内・外関連研究および背景研究を積極的に推進した。

大幅に遅れていたシリア現地調査許可取得を平成19年2月15日ようやく実現し、以来、7次にわたる現地調査をおこなった。この一連の現地調査の内容は、遺跡の分布調査(図1)、ガーネム・アリ遺跡の測量調査と発掘調査(図2～6)、ガーネム・アリ遺跡直近河岸段丘沿いの墓地遺構群の測量調査と発掘調査(図7)、ハマディン遺跡の測量調査、ガーネム・アリ、ハマディン両遺跡周辺の考古学的調査、調査許可地域内の地質・地形調査、ビシュリ砂漠台地上ケルン墓群の分布調査と発掘調査(図8)である。

そして現在、ガーネム・アリなどユーフラテス河氾濫原の都市的農耕村落遺跡群、ガーネム・アリ遺跡直近河岸段丘沿いの墓地遺構群、ビシュリ砂漠台地のケルン墓群それぞれの担い手が、同一の部族性をきずなとして都市的農耕村落と部族社会を形成したとする本研究領域の課題「ビシュリ山系セム系部族社会の形成経緯」の内実の解明に迫っている。

今後の研究計画

平成 20 年度の残期間に、研究発表会、公開シンポジウムを積極的に開催し、ニューズレターと研究成果報告書を定期的に出版する。ホームページを頻繁に更新して研究成果を積極的に公表する。現地調査を 1 回実施する。そして、国内・外関連研究をこれまでと同様に効果的に推進する。若手研究者の育成は本研究領域の重要な課題である。したがって、若手研究者の研究成果を積極的に公表する。

最終年度の平成 21 年度には、本研究領域全体の研究の

収束へ向けた研究班相互の連携を推進する。研究発表会と招聘研究者による専門知識の提供を積極的に開催し、本研究領域メンバーと当該研究領域の第一線で活躍する海外研究者の両者による国際シンポジウムを開催する。現地調査に関しては、総括的調査と補足的調査をそれぞれ 1 回ずつ、計 2 回実施する。若手研究者による研究成果を積極的に公表する。そして、総括班主催による外部評価を開催し、年度末には最終報告書を出版する。

大沼 克彦

国士舘大学イラク古代文化研究所

Katsuhiko OHNUMA

The Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq, Kokushikan University